

# 『新型コロナと発熱トリアージ』

西脇市立西脇病院 病院長

岩井正秀

本年三月上旬、新型コロナウイルスの勢いは、ついに当院が位置する北播磨の地にも及び、この地域の医療に大きな影響を与え始めました。そこで、病院として、通常とは違う隔離した場所で発熱の患者さんを診察し、トリアージ（選別）していくことを考えました。普段は使用していない門を入口として車で入ってもらい、他の患者さんとの動線が交わらないような流れを作りました。そして駐車場の一部を仕切って、そこに災害時用に以前から保管していたテントを建て診察室とし、患者さんにはそれぞれ自分の車で待ってもらうようお願いしたのです。

患者さんは原則として予約制で受ける方式をとりました。しかし当然のことながら、通常の病院業務も続けなくてはならず、どうしても医師の数が不足することになります。そこで西脇市多可郡の医師会に、この外来を手伝っていただけないだろうかとお願いました。すると十八人の先生がすぐに快く承諾して下さい、毎日午前は病院の内科医が、午後は開業の先生方がそれぞれローテーションを組んでテントでの診療にあたることになりました。この先生方の参加は誠にありがたく、その心意気には、病院の多くの職員も深く胸を打たれるものがあったことは言うまでもありません。三月下旬からこの発熱トリアージ外来はスタートし、毎日十人前後を診察しています。

梅雨や暑さ対策のため、五月中旬からはテントをたたみ、空調付きのプレハブに変更しました。そして現在まで約半年に渡って、この発熱トリアージ外来を続けています。これから冬に向けても、まだまだ油断はできません。インフルエンザの同時流行や、新型コロナ感染者の再増加にも備えなくてはならないのです。そのため院内では検査機器の整備や人員の配置など、様々な取り組みを行っています。この度の感染症を一つの災厄であると考えるとき、私たちは状況がさらに悪化した場合を常に想定して対応せねばなりません。それは、たとえば今日の建築においては、たとえコストがかかっても、将来発生するかもしれない震災に備えて免震構造を取り入れなくてはならないことと同義であります。

また、当院は地元の方々からも多くの支援、応援をいただいておりますが、さらに病院として地域の住民の皆さんにお願いしたいのが、病院に来られる日の自宅での検温であります。よくニュースなどで病院や様々な施設の入口で検温をしているところが流されます。しかしこれには多くのマンパワーを要しますし、誤差や受診の受付が混乱する危険もあります。来院する人達が皆自宅で検温していれば、このようなことは不要になります。もしも自宅で発熱があれば、当院の発熱トリアージ外来を、電話で予約することも可能です。そうすれば院内に入らずに診察を受けることになり、他の方との接触を防ぐことができるわけです。感染のリスクは可能な限り避けなくてはなりません。感染症に取り組むとき、来院する人達が検温一つを行って病院に来ることが、医療従事者にとって大きな手助けと支援になるということを、是非とも住民の方々に理解していただきたいと思うのです。それが地域全体で感染症と戦うということであり、

フランスのノーベル賞作家であるカミュは、その代表作『ペスト』の中でこう書いています。「ペストと戦う唯一の方法は、誠実さということです」「それは自分のなすべきことを、しっ

かりと行いきることです」この小説は七十年以上前に書かれたフィクションですが、今回のコロナ禍に立ち向かう私達にとって多くの示唆に富んでいます。そこで語られる「誠実さ」というのは、決して持って生まれた資質や性格といったものではなく、各自が困難に対峙したときに努力して獲得した、そしてそれを維持することに常に自覚的であらねばならない、確固たる精神であります。私達も、病院職員や市民を問わず、強靱な「誠実さ」をもって、これからも共に、邪悪なウイルスと戦って行かねばならないのです。

2020. 11. 30